
IS ~インフィニット・ストラatos~ チートによる特權

厨二王子&変態王子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

「」のPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「」インフィニット・ストラatos」 チートによる特權

【Zコード】

Z0713X

【作者名】

厨一王子&変態王子

【あらすじ】

……「」の「」書き

えつ？

いや書き

えーーー

女性にしか反応しない兵器『インフィニット・ストラatos』だが、突如、男なのに「」を起動できた織斑一夏。しかし、織斑一夏以外にも「」を起動させてしまった男がいた。

「こんなんでいい？」

ご都合主義、オリ主ハーレム、キャラ崩壊が嫌いな人はバックしてください。そうでない人は駄文ですがどうぞお楽しみを。

作品設定（前書き）

やつちつまつた……すでに難産だ。

お前が言い始めたんだら…！

作者二人の小説です。できる限り御都合主義は通せないのでどうぞ
お楽しみを。

機体せつて（r.y）

いつちやだめええええええ…！！！

【注意！】大幅に設定を変更しました。

<オリ主情報

名前：日守辰輝
ひのもりたつき

身長：170cm

体重：62？

容姿：一夏よりも僅かに小さめで細身な体格。筋肉質な訳でもなく、小柄に見えるためかっこいい年下の男の子とゆう印象がほとんど。茶色の混じった黒髪が肩にまで伸びていて鋭い目つきを……とゆうか早い話、聖剣の鍛冶屋のルークを考えてください。

性格：いつもは基本的に冷静だが、熱くなる時もあればギャグもいう時もある。常識が欠けている所もありギャグで言つた言葉を本当の事だと受け取ることもしばしば……。

とある事情で体がとてつもなく頑丈で身体能力がバカ高いため、仲間の為に体を張つて守つていたり、極度の恐怖に支配された時や集団戦闘時においては、仲間に對してかなりの自己犠牲の精神が働いてしまう様になつた。

オリ主IIS設定

機体名：ディヴァイン

世代：第四世代

性能：標準巡航時最大速度 3700km/h (約マッハ3)
イナジーウェイブな
イグニッショングースト

瞬時加速時 7500km/h (約マッハ6)

ノブレス・オブリージュ、フル展開時 15000km/h over

er
ヴァンガード・オーバード・ブースト

VOB 30000km/h over (約マッハ30)

スラスター：腰部スラスター × 2

脚部スラスター × 2
特殊可変ウイングスラスター 「ノブレス・オブリー

ジユ」 × 1 対

武装：【標準装備】

胸部	高出力ビーム砲「シャルレヴィカノーネ」
腕部	折り畳み式実体剣「アヴァランチ」 × 2
	レーザーソード発生器「レヴァテイン」 × 2
腰部	ビームサーベル「ファトウム」 × 2
肩部	翼上展開チエインガン × 6
背部	多弾装ミサイル「レギュラム」 × 40門
脚部	高機動ミサイルポッド × 20

【粒子化装備】

ビームマグナム「ワイルムルグ」 × 1
高エネルギー・ビームライフル「レイヴィント・ドライブ」 × 2 (通常・拡散・チャージ変形可能)
高初速ビームハンドガン「ヴァシコラ」 × 2
アサルトライフル「二一レンズ」 × 1
ショットマシンガン「ズイン」
連結実体刀「布都ノ御靈」

单一仕様能力：「?????」

備考：天才科学者、篠ノ之束から特注のオリ主専用機。オリ主の肉体が特に頑丈なのと本人の希望により、ISのシールドバリアーをピンポイントで発生出来るようになりハイブリッド化に成功かつ、圧倒的な速度を出すことに成功したIS。世代は一応第四世代となつてはいるが、これは「Non Restriction Project」、通称「Non infinite Storatos Project」による作品。「Non Restriction Project」 = 「制限の無い」の通り、すべてにおいて規格外の作品と

なってしまった。

色は全身純白、全身の格好は……とゆうか言つてしまえばイメージ的には重装備のアーマードコアのホワイトグリンドを思つてくれて結構です。

「ノブレス・オブリージュ」は本体の肩部にセットされていて、そこにチェインガンが肩の近くに一つ、翼端の上下に一つずつ配置されそれが左右体称になつていて。また「ノブレス・オブリージュ」、背部スラスター、腰部スラスターによる加速、減速、移動、姿勢制御が任意でできるため、本来その能力を担つてているP.I.Cと併用になり、結果的に全体の機体性能は従来の一乗となつていて。

エネルギー系による戦闘を中心に行うため、エネルギー残量が問題だつたが基本のシールドエネルギーはバリアーを局部展開するように入したり、各部に小型エネルギー・コンデンサを配置したり、武器のエネルギーの出力を変更できるようにしたため、元々の活動時間よりもかなり長時間行動できるようになつた。

作品設定（後書き）

俺ばー都合主義は嫌いなんだよおおおおおーーーー

一 知るかバ力

-俺は激しく不安だ

プロローグ（前書き）

・更新がかなり遅れましたが、本編開始です！

・本編つていうがまだプロロー（r y

・黙れ。この小説の作者は学生です。多少の遅れなどは田をつぶつてもうう事を期待しています。

・……作者が学生の奴なんてたくさ（r y

・黙れ、潰すぞ。……どうかお気に入りやしおつに挟んで氣長に見てくれる事をお願いします。

・……これどう見ても宣伝じや（r y

・……潰すつ…！

・フチつ！

・それでは本編どうぞ！

プロローグ

カツ、カツ、カツ、カツ、

足元もおぼつかない程、暗黒に染まつた合金製の螺旋階段。そこで無機質な足音を響かせている少年。彼の手には給食でよく使うようなトレーの上に、きちんと皿に盛りつけられたフルーツサラダ、スライスしたパンのみと肩に白い水筒を引っ提げていた。

「これを吃べるのは運んでいる少年ではなく、この長い階段を進んだ先の小部屋に住み着いて、すでに一週間籠りっぱなしの世界的指名手配者に吃べさせるためだ。」

だが別にこの先にいるのは歴史に名を残すような凶悪な犯罪を犯した大罪人な訳でもない。ごく普通の、どこにでもいるようなか弱い一人の女性。

だが彼女は、犯罪を犯さずに、世界から指名手配されている一人の科学者。

彼女が指名手配、それも世界的にされている理由ただ一つ、彼女があるものを作ってしまった、ただそれだけの事。

世界から狙われる程の物を作つた、ただそれだけ。

..... キイイイ。

「…… 束さん。 入りますよ。」

長い螺旋階段の果て、両手で持つていたトレーを右手に寄せて冷たい鋼鉄のドビラを開ける。室内は階段の闇よりも僅かに明るい黒。床にはどこから繋げてきたかも判らないほどのケーブルが所狭しと敷き詰められ、壁が見えるはずの場所には専門の科学者でも一目では理解出来ない機械たちが、これまた窮屈に並んでいる。

壁や床が僅かに姿を見せている場所にも、さまざまな設計図や組み込まれていない機械の部品が、大小関わらず乱雑に、それでいて無駄がないように、すべてのスペースを埋めている。

その部屋の中央、そこに彼女 篠ノ之束しののたばねがいた。

。。。。。。。

だが、篠ノ之束は部屋に入ってきたことに気づかなかつたのか、空中に投影されたキー ボードを叩き続けていた。

その数、実に六枚。

常人には到底不可能な枚数。だが束は全てを並列作業で使いこなしていた。

それらすべては、キー ボードとは別に空中に投影された六枚のディスプレイに接続されており、高速で叩かれている情報を送信し新たな情報がディスプレイに表示されていく。そして次々と送られてくる情報で、画面の景色が千変万化してゆき、そのディスプレイに呼応するかのように束の周辺に設置されている機械が、これまた甲高い機械音による交響曲を響かせ辺りの音を搔き消してしまつていた。

（これじゃあ返事もできない訳だ……）

当の束自身もこりからこは一切視線をよじりす、目の前の“研究品

”に意識がいつてしまつていてまったく気が付いた様子はなかつた。この際仕方ない、と割り切つてケーブルの樹海を踏み越えていく、トレイを落とさないようひたむかへつと束の傍に近づいていく。

「束さん。食事の時間ですよ。」

「お～～～！たーくん流石だね、また時間。びつたりに」飯を持つてきたよ。びつくり、びつくり！」「

たーくんと呼ばれた少年・・口守辰輝の声に気が付き、束は投影していたディスプレイとキー・ボードを、指を一振りして消してしまふとくわふと振り返つた。

束の姿は奇妙な格好をしていた。一見するとその服装は暗黒の中であるにも関わらず、その存在を誇張する漆黒。だがその上半身は男性の着る滑らかな燕尾服であるのに、下半身はゴシックロリータの様なふわふわとしたスカート。ポケットが何故かメルヘンなクリーになつてゐるのは、奇妙と言つかむしろ珍妙と呼ぶべきだらうか。

日守は、束の服装は毎回何かのテーマで決まつていてと思案してみる。

「えつと、束さん。今回の服装はどのよつたなテーマなのでしたつけ。」

「む～～、ひどいな～たーくん。今回はヘンゼルとグレーテルなんだよ？まあ、そろそろこれにも飽きてきたから新しいのを絶賛制作中なのだ！～」

「ヘンゼルとグレーテル？」

田守の記憶では、ヘンゼルとグレーテルはグリム童話で有名な作品で、こんな服装ではなかつたはずと不思議に思い首を傾げる。

「ググつたんだよ。」

「？？」

「ま～ま～気にしたら負けなのだ！～って、そんな事より、た～くんの抱えているそれはもしかして、た～くんの敬愛しそぎで止まない束さんへの貢物かね！～！」

田守の疑問をよそに、束はウサギのよにひよこひよことケーブルの山を越え、田守のトレーの前に跳んで来た。

「うむうむ。い～つもすまないね～、いやいやお前さん、それは言わない約束でしょ。な～んてね～。いつたつだきま～す～～！」

ガツガツと、おそらく大人の女性がたてるはずがないであろう音を躊躇なく撒き散らし、トレーを自分の元に引き寄せることもせず、田守に持たせたまま子供の様に食べ始めた。

（……本当にこの人なのだらうか？）

束の子供の様に無邪気な行動を見せられると、ふつとそんな疑問が浮かんでくる。本当にこの人が世界に追われるほどの物を作つてしまつたのかを。

だがそんな疑問は束の目の前にある“研究品”を見れば一瞬で瓦解してしまう。無数の巨大な機械に囲まれた中央の台座。そこにそれはあつた。

主の帰還を待つか」とく跪く圧倒的な白の甲冑、
それこそ世界を狂わせた研究品、 “ I S ” ^{アイ・エス}。

正式名称インフィニット・ストラトス。これが世界に認められたのは、約10年前に起きた事件、通称「白騎士事件」と言われているのが最初だつた。その瞬間を境に I S ^{アイ・エス} は世界のどの兵器をも時代遅れにした。既存の戦闘機やミサイルなどでは I S ^{アイ・エス} の前では子供の児戯でしかなかつた。

その圧倒的な戦闘力を持つ兵器を生み出す事の出来る篠ノ之束は、当然のことく世界中の研究所から目をつけられる事になり、そのどこにも所属する事無く自由気ままに世界を飛び回つてゐる。一応、日本の研究者であるため日本からは、時に脅迫めいた通告があつたが、当の束はそんなこと、どこ吹く風である。

そんな束は今現在、立て籠もつていた反動で日守の持つてきた食べ物をすぐに食べつくし、機材に占領されていないテーブルを使って、水筒に入つていた紅茶で優雅にティータイムをとつていた。

一口飲むたびに、ふにゃーと顔をとろめかせ無邪気に机にうつ伏せ、まるで子供の様だ。日守も隣に座り、束が即興で作り上げた地下でも使えるテレビに映し出された映像を一緒に見ていた。こんな所でも束の“天才性”が發揮されているのは、やはり束が“天災”だからだろうか。

「スローンとかが無いのは減点だけど、まあ束さんはこれでもじ

ゆーぶんだよ。」「

「それを言つのであれば、ちゃんと顔を出してくれればその度に作つてあげますから。」

そういうて日守は軽く言葉を交わし、テーブルの上で毎日放送している見慣れたニュースに視線を移した。テレビのニュースではこれまた見慣れたニュースキャスターが最新のニュースを放送していた。内容はどこかのIISの研究所が大幅な赤字に見舞われていたところに研究の途中で爆発事故が発生。よつて倒産につきその研究所に資金繰りしていた会社も倒産とゆうことだった。

束は『全く物騒だね』と、緩やかな表情だったが、日守は、違つた。

・・ピクリ

「束さん、またですか？もう俺で最後にしてくださいよ。」

「残念だけど、たーくんの言葉でもそれは絶対に無理。あそこはね、私の大切なIIS（子供）をぐちゃぐちゃにしていたんだよ？そんな奴はね、私は絶対に許さない……絶対に、絶対に、絶対に、絶対に、絶対に許さない。地獄の底まで逃げても、潰す。」

日守が隣の束に目を向けると、そこには一見女神のように穂やかに微笑む束の顔。だが日守は確かに感じていた。その裏の、般若の顔を。

ここで、いつたんISについてもう少し話しておこう。世界を変革させた研究品“IS”これにはある事柄について開発初期から問題にされてきた事がある。

それはISには女性にしか乗れないという決定的な欠点があつたとゆうことだ。ISの出現により、アラスカ条約というものが取り付けられ、その中にISの情報掲示があつたが、ISの最も重要なコアパークだけは今でも束しか作れない。それにより世界の価値観は一変、「男尊女卑」から「女尊男卑」と世の中となつた。

だが、それを世界すべてが認めただろうか？

いや、認めなかつた。僅か一握りにも満たない一部の男たちは、男性の使えるISを作ろうとした。だが、ISはいくら外装が作れてもコアパークが作成が出来なければ意味は無い。ならば、男たちはISの作成と並行し、もう一つの、悪魔の研究を始めた。

すなわち、男を改造し、ISの使える男を作る悪魔の研究。

しかし、そんな事に意味は無い。人間を改造しなければISに乗れないなら、改造していない普通の男が乗れるはずがない。そんな単純なことにも気づかずただ妄想的に研究していた。

規模を広げ、根を張り巡らせ、どんな所でも関係を持ち、人種、

年齢に始まり、髪の色や瞳の色、身長や体重、さらには経歴さえ、全てを問わず世界中から実験体として男性を集めに集めた。

だがそんな研究を始めて十数年、彼らは一つの失敗をしてしまつた。
“歩く天災”^{ウォーキング・ディザスター}、篠ノ之束の逆鱗に触れたのだ。

彼らは《制裁》をされた。

嵐の様な際限のない徹底を。
悪魔の如く圧倒的な制裁で。

その存在を知つたその週には研究所はすでに存在が消滅していた。
物理的にも、歴史的にも無かつたことにされた。そして、束が
そこで拾つた一人の青年。

その少年こそ、日守辰輝。時期にして僅か一週間ほど前の事だ。

『また』と日守が言つたのは今は無き日守のいた研究所、それ以前の事を含めてのこと。束は日守に話しただけでも大小合わせて數十、束の所に来てからも既に二つもの研究所を粉碎したらしく、日守は要は、やりすぎると言つたかったらしい。

「今回は、どこまでですか？」

呆れつつも、今回の結果について聞いてみる日守。それに別段気にもせず、束は今回の結果について日守に告げる。

「おいおいたくくん、束さんを侮っちゃ困るぜい。勿論今回も一人も死人は出さなかつたし、機材も全部回収。私がやつたなんて、

人類に絶対分からぬ様にしたから安心しなさい……」

やはりとゆうか、束は自由奔放という言葉と共にいた。そんな束に日守は額を抑え、はあーーっと深く嘆息する。束の行動はすでにオーバーキル、だがそんなことは束にとっては問題外。常に自分のルールでしか動いてくれなかつた。

ニュースキャスターは肝心の研究所のニュースを既に話し終えて、次の事件について滔々と語つていた。次のニュースももちろんIS。その画面にはどこかの女性がISに乗り、煌びやかな姿を映していた。

と、突然

「そそ、たーくん。ちょっと手を出してくれない?」いひ、手のひらを上にびろーっと。」

「はい?何ですか?」

日守は束に言われるがままに手を出すと、じやらりと、純白のネックレス手のひらにのせた。

「……これは?」

「束さんからのプレゼント、暇だつたからたーくん専用のIS作つちやいました!――」

「……はい？」

「だから、これはたーくん専用のエビ。名前は、『トイヴァイン』、よひしへね？」

絶句。

一瞬、田守にはその言葉の意味が理解出来なかつた。だがその剝那の後、その意味を理解する。

「……こつかやると黙つてこまつたが、まさかこんなにも早く。」

「んん？たーくん、変革といつものば、ひとつ起つると、必ずや次の変革を呼ぶよいにできてこるものだよ。一改革はたつた一つじや終わらない（・・・・・・・・・・・・）のだよ。」

やう言つて束は悠然と椅子に座つ、空中に指を走らせ、一枚のティスプレイを呼び出して、テーブルのテレビに続く新たな光源を生み出す。ペペッとその画面を操作して切り替えたら、田守にも分かるように反転させた。

「よつて、たーくんはIFS操縦者になつたので、IJSに行つても
いつ事になりました～！～わーーー！」

「IJSは……」

そこには書いてあつたのは、『公立IJS操縦者育成教育機関【IJS
学園】』の文字。IFS操縦者は原則いづれかの国家に配属されること
になるが、IJS学園に入学すればその制約からは外れることがで
きる。日守がIFS操縦者になつたための措置だつと日守は考えた
のだが……

「嫌です。」

「えつ！？ ちょ、ちょつとたーくん。育て親でもある束さんの言
いことが聞けないの！？」

「勝手なこと言わないでください。俺はここにいて束さんの世話
をすることに決めたんです。ここに行つたら束さんの傍にいれなく
なるので却下します！」

「たーくんの頑固者～！～……って言つても、もう入学書類とか
面倒臭いのは全部学園に送つちゃつたから、問答無用で学園に入学
してもうう事になつてるから。へへ～ん、束さんのだ～いしょ～
り～！～いえ～い！～」

「なつ！～束さんそんなものこいつの……」

「え～い、五月蠅い子には拳骨だ！」

「チーン～！」

「痛つ！…何するんですか、束さん…！」

「言つこと聞かない子には拳骨しあやうぞー。」

「なんでいう前にするんですか？…！」

喧しく一人が言い争つ中、束の作ったテレビには、また新たなニュースが流れていった。

そこに煌々と、映し出されていたのは『世界初、男性のエス操縦者！？』の文字が。

それを見つめるのはただ一つ、『田の甲冑』がジッヒ、見つめていた。

プロローグ（後書き）

- 次回がいつになるか作者も分かりませんが、どうかこの小説を
よろしくお願ひいたします。（ほら、お前も言えー。）

.....（ピクピク）

- 返事がない、ただの屁のようだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0713x/>

IS~インフィニット・ストラトス~ チートによる特権
2011年12月25日12時51分発行